

コオバシギ *Calidris canutus* (Linnaeus)

【選定理由】

国内でも生息数の少ない種であるが、過去には県内で春に 50 羽、秋に 20 羽程度の群れが確認されたこともある。しかし、現在の確認数は県内合計でいずれも 1～数羽である。春の渡りは成鳥で滞在期間も短く、気象条件などによりその飛来の頻度や数に変動が大きい、秋の渡りはその年生まれた幼鳥が主体なので、その数の減少は絶滅の危機を表しているといえる。

【形態】

全長 23～25cm、翼開長 57～61cm。夏羽の上面は黒褐色で背や肩羽に赤橙色の羽が混じり、顔および下面は一樣な赤橙色。冬羽は、上面が一樣な灰褐色で羽縁が白く、下面は白色で胸から脇かけて灰褐色の斑がある。幼羽は、冬羽に似るが上面の褐色味がやや強く、白い羽縁の内側に細い黒褐色帯がある。



愛知県西尾市, 2018年5月15日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

春と秋の渡りで伊勢・三河湾沿岸の干潟に飛来するが、春期の記録は多くない。

【国内の分布】

北海道から沖縄にかけて、春と秋の渡り時期に渡来する。

【世界の分布】

シベリア北部、北アメリカ北部、グリーンランドで繁殖し、西ヨーロッパ、アフリカ、オーストラリア、中南米で越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

シギの中でも特に干潟に依存して生息しており、県内の確認場所は例外なく海域か、その直近にある干拓地と埋立地に限られている。愛知県鳥類生息調査地点の中で記録があるのも「矢作川河口」「汐川河口」「庄内川河口」の3地点に限られており、かつてシギ・チドリの宝庫と呼ばれた「鍋田」でも、1970年の調査開始から全く記録がない。春は4～5月に中間羽や夏羽で飛来するが、記録のない年も多く、滞在期間も短い。秋は8～10月に飛来するが大半が幼鳥で、比較的早い時期には冬羽に換羽した成鳥が見られることもある。県内ではその他にも、越夏期や越冬期の記録が数例ある。干潟や汽水の湿地で、底生生物や昆虫などを食べる。

【現在の生息状況／減少の要因】

国内でも飛来数の少ない種であり、県内では1973年の春に飛鳥村の干潟で50羽の記録があり、1990年前後の秋に矢作川河口と汐川河口で21羽の群れが見られたこともある。近年は春秋共に、県内合計で1～数羽程度が飛来しているに過ぎない。県内における減少の要因は、海域の貧栄養化などによる干潟の生物の減少や、満潮時に採餌や休憩ができる干潟の後背湿地の消失があげられる。

【保全上の留意点】

残されている干潟の環境を保全するとともに、干拓地や埋立地に存在する遊休地に、失われている湿地の環境を再生する努力が必要である。

【特記事項】

本種の繁殖地は北半球の極地近くに広く分布しているが、アジアの繁殖地は局地的である。世界的には数の少ない種ではないが、国内では東シベリアで繁殖するオバシギの方が圧倒的に多い。

本種は、種の保存法で国際希少野生動植物種に指定されている。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.124. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)